書　評

金坂清則著　『ツイン・タイム・トラベル イザベラ・バードの旅の世界』
（英語書名）　In the Footsteps of Isabella Bird: Adventures in Twin Time Travel
平凡社　2014年9月　162頁　3,600円＋税

旅行という人の営為，それから生まれた旅行記という述作を，地理学はどのように捉えることができるのか，言いかえれば旅行や旅行記というものは，地理学をどのように豊かにすることができるのか，という問いかけに，金坂清則氏のイザベラ・バードとの出会いに始まる一連の仕事は，確実に一つの答えを出してくれているようである[1]。

これまでの地理学における旅行や旅行記の取り上げかたをみるために，本欄でも少し前に書評が書かれた近刊の人文地理学会編『人文地理学事典』を繙くと，旅や旅行記についての項目はなく，「名所図会」という小項目はたてられているが，旅行記への言及はなく，わずかに「近代以降のさまざまな地図表現」という項目において「旅行案内」が名所案内や鉄道沿線図と並んで，すなわち旅を案内する道具としての地図が取り上げられているだけである。ただし旅行という用語ではなく，ツーリズムなら，「ツーリズム・観光を対象とする地理学」という大項目がたてられかなりのページ数がさかれている。ツーリズムとは「人々が日常の範域以外のところに旅行したり，滞在したりすること[2]」（World Tourism Organization 1993）とされており，広い意味で旅行を含むのであろうし，その理論的な研究動向や最近の研究分野については詳しく述べられているが，過去の旅行者の旅行や旅行記については特に述べられていない。

しかし英文の人文地理学事典[3]は，旅行記（travel writing）という項目と旅行理論（travelling theory）という項目をたてて2ページ近いスペースを割いている。その冒頭で，これまでの旅行記の扱いについて，純文学でも学問的な民族誌の分野でもまともに取り扱われなかっただけでなく，伝統地理学でも歴史学でも締め出されてきたことを指摘している。しかし最近になり学術界での新しい動向により，人文学や社会科学で旅行記が積極的に再評価されつつあるといい，その主要な3方向を挙げている。第一はポストモダニズム論の勃興である。とくにこの方向から文化の一要素としての旅行またその記述である旅行記に関心が寄せられている。第二はポスト・コロニアリズム論の進展である。これはサイードのオリエンタリズム批判に始まる思潮であり，とくに植民地にかかわる旅行記は想像上の地理の回復において重要な資料とされる。第三はフェミニズムとのかかわりである。19世紀から20世紀初にかけて女性によって書かれた旅行記は非常に重要であるのに，地理学からは正当な扱いを受けてこなかった（これはサイードも同罪だとしているが）ことを克服するための視点として挙げられている。

別の著作の中で金坂氏も，このような旅行や旅行記の新しい研究動向に触れ，自分の研究はこのような方法論によるものではなく，特定の人物の旅行と旅行記を集中的に研究し，その旅行にかかわる事実を正確に明らかにすることを目標にするとしているが[4]，このような仕事が蓄積されることによって，例えば事典に挙げられているような旅行理論も補強されるのではないだろうか。

私も以前，地理学の方法にかかわるものとして，旅や旅行記について少し考えてみたことがある。それを再度ひいてみたい。

「われわれ地理学者にとってこうして旅をしたり，街を漫然と歩いたりすることが，いわゆるフィールドワーク，ミクロなスケールでのフィールドスタディとは異なるものなのか，それともどこかに通じ合うものがあるのか，またいわゆる「探険家」たちの旅と，どこが違うのか，かれらの求めたものと今われわれが求めているものとはどれほどかけ離れたものか。

そもそも探検と地理学は，かつては蜜月の関係であった。世界の文明は必ずその周囲に未知の海洋や大陸をもち，その深奥を探り極めようとした人々を[5]送り出してきた。あるいはこのような探検の精神をもつ民族こそが，文明の担い手になっていったともいえよう。Geo-graphia＝地の描写としての地理学は，そこから生まれた。さまざま

な探検によって地理学はより豊かな「学」に育っていった。近代において科学的視角が生まれてからも，探検は「学」を発展させるための重要な方法であった。

しかし未知なる土地の消失とともに，探検という行為そのものが意義を失った。既知の土地の中に，なんとか未知の渓谷や未知の洞窟を探し出して，「探検する」ことはできても，それはある特定の分野にトピックス的な知識を少し加えるだけで，ある「学」の体系を作り変えるほどのインパクトはもたない。いまや探検は，火星や金星など，はるか宇宙空間に対して行われる探求にふさわしいと思われている。

いつしか地球上における「単なる探検」や「単なる旅行」は，「学」ではなくなり，地理学者はフィールドスタディ・フィールドワーク（野外研究・野外調査）を自らの方法として位置づけるようになった。それは単なる発見を求める探検や，見聞を広める旅行ではなく，より精緻な「研究」や「調査」なのであり，「現代の学」としての地理学にふさわしい方法とされているのである（さらに現在は，このようなフィールドワーク自体も必ずしも地理学固有のものではなく，人類学や社会学，あるいは歴史学や考古学，建築学なども，独自のフィールドワークの方法をもち，それによって新しい局面を開いていることも考慮しなければならない）。しかし探検や旅行を通してみる見方は，地理学にとってまったく有効性を持たないものなのだろうか。あるいはわれわれが現在フィールドワークと呼んでいる方法には，探検や旅行と通じるものはないのだろうか。」[6]

かつて私が感じた地理学と旅行あるいは探検，そしてそれから生み出された作品との関係についての根本的な疑問に対し，金坂氏は非常に緻密で正確に「旅行記を読む」という作業の中で，拠るべき方向を示してくれたと思うのである。

前置きが長くなったが，著者によって提案されている「ツイン・タイム・トラベル」という方法は，そのような新しい動向にさらに魅力的な一ページを加えるようである。ツイン・タイム・トラベルとはどんな旅なのか，これは著者自身の説明をひこう。

著者は「旅行記の読みの定理」として次のようなフレーズを記している（原文のまま）。

「旅行記を読むとは，その基になった旅を読み，
旅する人を読み，旅した場所・地域を読み，
旅した時代を読むことである」[7]

これに先立ち，著者は，イザベラ・バードの旅と旅行記の魅力を次のようにまとめている。

「イザベラの旅と旅行記の魅力は，異境の地，非日常の世界を旅し，人々の中に入り込み，目にするものの特徴や本質を，研ぎ澄まされた感性と知性でもって一瞬にして捉え，率直な思いも込めて鮮やかに描き出し，その対象が自然や人間・社会・文化のあらゆるものに及ぶという特質を抜きにしては語れない。この特質こそは，他者の追随を許さないイザベラの最大の美点であり魅力である。」（4頁）

「そしてこの特質を正確に理解して翻訳し，文化の媒介者としての役割を果たすには彼女の旅の世界に足を運び，同じ場所にたって考えることが不可欠である。」（同上　傍点筆者）

この信念に基づいて，著者はフィールドワークを重ね，その土地に立ち，かつてイザベラ・バードが眺めたものと同じ景観や風物を自らも眺めようとしてきたのである。著者はこのような「過去の旅行記に描かれた旅を，私たちの旅に取り込み，2つの旅の時空を主体的に重ね合わせる旅」を「ツイン・タイム・トラベル」と呼ぶことにしたという。イザベラ・バードの旅をテクストとして実践したこの方法は，いわゆる研究だけに有効なものにとどまらず，一般の旅行の方法としても意義深いものになるであろうし，新しいツーリズムの道を開くことを期待して，フィールドワークの際に撮りためた写真を中心に，歴史的な影像も加え「ツイン・タイム・トラベル　イザベラ・バードの旅の世界」と題して，世界各地で写真展を開催してきた。その成果が結実したのが本書なのである。[8]

過去の旅行記や歴史物語，場合によってはそれがフィクションであっても，その旅行の足跡をたどったり，物語の舞台をめぐったりするような旅は，これまでにも行われ，その旅行記もひとつの文芸作品になっているようなケースはよく見られるだろう。歴史上，日本でもっとも有名な旅行記は芭蕉の『奥の細道』であろうが，「奥の細道を辿る」とか「奥の細道を読む」というタイトルの

書物は，学術的なものも含めて枚挙にいとまがない。また奥の細道のような文芸色の濃いものではなく，地域の自然や風俗に真摯な観察眼を向けた旅に生き，貴重な旅行記を大量に残した菅江真澄については，文学史家だけではなく民俗学者や人類学者も眼を向けている。宮本常一が菅江真澄の旅を追う情景は，旅に生きた二人の巨人が対峙するという意味でもツイン・タイム・トラベルの実例というにふさわしいだろう。[9]

秋田県では菅江真澄の紀行文や地誌を活かして地域活性化をはかろうという取り組みに，明治初期に東北を旅したイザベラ・バードが引き合いに出され，金坂氏のツイン・タイム・トラベルが有効な方法であると高く評価されているのは，氏の意図が実際の地域振興政策の中で活かされていることを語っている。[10]

真澄より少し早い江戸時代初期の本草学や医学に詳しい学者でありながら，同時に地誌や紀行文にもすぐれた作品を残している貝原益軒についても金坂氏は注意を向け，ツイン・タイム・トラベルの観点から益軒の京都での旅とその著作である『京城勝覧』について論究している。[11]

しかしイザベラ・バードの場合，その旅の範囲は世界各大陸にわたり，時間もその一生に及ぶ。著者はその旅を6期に区切っている。それを簡単に辿っておこう。それによってその超人的な旅の時空の広がりがわかるだろう。

第1期（1854年～）大西洋をわたって北米のアメリカとカナダに向かう旅である。その結果が『英国女性の見たアメリカ』と『アメリカ合衆国のキリスト教の諸相』という著作になっている。

第2期（1872年～）大西洋からアフリカの喜望峰を回りオーストラリアへ。その後，ニュージーランドを経てハワイ・サンドウィッチ諸島へ。さらにアメリカ西海岸へ向かい，大陸を横断して東部へ至り。最後は大西洋をわたって帰国。この間，イザベラ・バードの人生においては大きな意味をもつジム・ニュージェントとの出会いと別れがある。帰国後『ハワイ諸島の6か月』『英国女性ロッキー山脈滞在記』を出版。

第3期（1878年～）ここからアジアへの旅が始まる。大西洋・アメリカ大陸・太平洋を横断して5月に横浜に上陸，12月まで日本各地を旅する。イザベラ・バードの日本の旅は「奥地」に限られていたというのは大きな誤解であることを筆者は繰り返し説いている。[12] 日本のあとはまだ清朝時代の広東・香港を経てベトナムのサイゴンへ，その後インド洋を横断してアラビアへ，スエズ運河を通って海路帰国している。その成果を『日本の未踏の地』（『日本奥地紀行』[13] という名で訳出されているもの）として刊行，東南アジアについては『黄金半島とその彼方』を出版。しかしこの間，愛妹を失い，ジョン・ビショップと結婚したもののすぐに死別するなど，私生活では不幸に見舞われた。

第4期（1887年～）アイルランドへの短期間の旅から精神的に復活し，89年からアジアへの旅を再開する。今回は海路をアラビアに赴き，そこからインド北部カシミールのスリナガルに至る。ここからさらに奥の高地いわゆる小チベットのラダック地方に入り，再びラホールへ帰っている。インドからの帰途はペルシャ湾からイラク・イランを経由してクルディスタンの山地をぬけて黒海へ出ている。これらの旅はいわば大英帝国の深奥部ともいえる地へのものであり，その成功は高く評価されたという。旅行記としては『ペルシャ・クルディスタン紀行』や『チベット人の中にて』に結実した。イザベラ・バードの社会的評価も高まり，王立スコットランド地理学協会や王立地理学協会の特別会員に選出されたり，ヴィクトリア女王に拝謁を許されたりした。

第5期（1894年～）再び極東に向かう。太平洋を横断して日本に至り，九州から朝鮮半島に向かう。その後は，朝鮮と奉天，北京など中国北部，福州など東南海岸などを訪れるとともに，本格的に中国の内陸部の旅を敢行する。後に『揚子江流域とその奥地』に記述される半年にわたる旅である。四川省成都からさらに奥地，梭磨河渓谷まで赴く。それから再び日本に向かい，熊本，日光，東京などに滞在する。最後にソウルに立ちより，97年1月に帰途に就く。揚子江流域の旅行記のほか，『朝鮮とその隣国』『中国写真集』『新版日本の未踏の地』を刊行する。

第6期（2000年～）モロッコへ半年余の旅を行なうが，既に70歳を超え，健康もあまりすぐれないまま1904年10月7日逝去する。

このように見れば，イザベラ・バード（1831-1904）の旅がいかに大きなスケールのものであったかがわかるであろう。本書には冒頭にその世界中の足跡が期別に世界図に書きこまれているが，まるで大航海時代の航海者の足跡を記したものと変わらない。最初の北米旅行を始めたのが1854年22歳の時，それから73歳まで50年余をかけて世界を旅した。訪れていないのは大陸で言えば南極は論外として，アフリカ大陸と南米大陸だけであって，当時の常識的な感覚ではまぎれもない世界一周である。[14] ユーラシア大陸でもロシアのシベリア平原，中央アジア，モンゴル高原などが未踏地であるが，これらの土地は一般に旅行することは困難で，むしろ「探検」の対象として，また各国の探検家がしのぎを削ったところであった。[15] しかしイザベラ・バードも，平穏な文明圏を旅したのではなく，むしろ探検と言った方がよいような治安上からも危険な地域を何度も踏破している。特に当時の西洋人の眼から見て，しかも女性一人で（旅行隊そのものは女性一人ではないが），容易に旅に行くことを選択するところでないことは明らかである。中国内陸の揚子江上流万県から四川盆地に至る道，インドの小チベット地帯，トルコのクルディスタン地方，また日本の奥地でも，冒険心をもたないでは行けないところであったはずである。

19世紀末のこの時期に，なぜイザベラ・バードがこのような旅行を企画したかについては，金坂氏が別の著述で解き明かしてくれているし[16]，本稿がとりあげるテーマでもないのでこれ以上は触れないが，まさに当時にあって最大規模の旅行を敢行し，さらにその成果を旅行記という形で刊行することによって，現在のわれわれの知的財産として共有することを可能にしているという点で，稀有な存在であることはいくら強調してもしすぎることはないであろう。そしてその稀有な存在に対し，「彼女の旅の世界に足を運び，同じ場所にたって考える。」ことを実現した一人の日本人の地理学者がいることも特筆大書して然るべきではないだろうか。

これでようやく本書の具体的な内容を紹介することになるが，本書の大きな特色と筆者が考えるのは以下の４点である。

① イザベラ・バードの最初の旅から始まり，最後のアイルランドの旅まで，すべての旅をフォローし，彼女の旅の全貌がツイン・タイム・トラベルとして正確にわれわれの眼前に提示されていること。そこには詳細な行程図が示され，具体的な大縮尺の地図として行程が示されていること。これは実際やってみると極めて困難であることがわかる。旅行記には逐字地名が記され，概略図が入っているが，その地名はしばしば現在ではわからないもの，あるいは表記のスペリングが不確実なものなど，綿密な考証を要する場合が多いからである[17]。

② これが本書の最大の特色であり，ツイン・タイム・トラベルの本領であるが，上記の行程に沿って，いくつかのポイントを設定し，現在の写真（多くは景観写真であるが，時には建築，風俗，人物など適宜その場にふさわしい情景が選択される）に，一部ではあるがイザベラ・バードの頃の，場合によっては彼女が撮影した写真や古地図が配される。さらにイザベラ・バードの旅行記から，該当箇所を記述した文章を挿入してある。このポイントは行程図に正確に記されており，総計110ある。写真には著者の短いコメントも附されている。これらの写真はすべて著者が自ら撮影したもので，既存の写真集から採ったものやプロから借用したものは皆無である。まさに実際に「足を運び，同じ場所にたった」からこそできることなのである。さらにこの写真はすべて原版のネガからトリミングなしでレイアウトされているとのことであった。写真というのは空間の切り取りであるといわれるが，それは著者の瞬間的な感覚で切り取った風景なり人物像を全くあとからの加工を加えずに提示するのがベストだというこだわりによるもののようである。[18]

③ 次に挙げたいのは，本書の全ての記述が日本語と英語の双方で書かれていることである。レジュメとタイトルだけを英語で附するという通常よくある国際版ではなく，すべての説明，引用文，写真の自筆キャプションに至るまで，すべて両言語で書かれている。すべてを照合したわけではないが，冒頭の解説など

は，英文の方の文意がわかりやすいという印象を受けたものもある。本書のもとになったものが，世界各地で開かれた写真展「ツイン・タイム・トラベル　イザベラ・バードの旅の世界」にあることは最初に述べられているが，2004年の国内三か所を終えてから，2005年10月のエディンバラ展（エディンバラは長くイザベラ・バードが暮らしたところである）に始まり，イギリス，アメリカ，中国と海外で11か所にわたって開催されてきた。いずれも多くの観覧者を集め非常に好評であったという。英米ではスコットランド図書館の強力な支援を受けたというが，スコットランドにしてみると地元の偉人を[19]，このような方法で再評価してくれるJapanese Geographerの出現は，驚きと称賛を以て迎えられたであろう。この写真集がバイリンガルで出版されることは，今後この仕事が大きな発信力をもって国際的に広がることを促進すること，想像に難くない。著者及び出版社の英断を多としたい。

④ 最後にあげたいのがこれは本書のすべてにわたっていえることであるが，随所に顕れている著者の対象に対するこだわりである。先ほど述べた写真のレイアウトもその一つであり，上述した行程図の作成や，写真ポイントの設定，原著にある地名や挿入写真の精密な考証，そして本書で述べられていないが，著者が最もこだわっているのは，原著から日本語に翻訳する場合の訳語訳文の選定である[20]。本書でポイントごとに引かれているイザベラ・バードの原著の翻訳も，金坂氏が自身で翻訳しているものである。日本奥地紀行については金坂氏の翻訳が完成しているが，それ以外のものは写真展のために用意されたものである。原著と対照すればそのこだわりぶりがわかると思う。また本書には，原著の旅行記の初版本が写真と共に掲載されているが，これもすべて著者が海外の古書店などから購めたもので，稀購書もあると聞く。このような初版本をあつめるのは骨董趣味によるものではなく，翻訳をする際に様々な版本の比較し，原初の形を正確に知ることを重視するからである。神は細部に宿るという諺があるが，本書には本当に細部にまで周到な気配りがあり，時には執拗と感じるほどのこだわりが随所にあるが，それが本書を魅力的なものにしているのも間違いない。

最後に付け加えたいことは，本書の価格である。通常の書評ではあまりこのようなことには言及しないものであろうが，本書の一般読書界あるいは国際市場への普及を考えれば，本書の価格はまことにリーズナブルであり，ここにも出版社の英断をみることができる。会社の100周年という記念すべき時の出版ということもあるのかもしれないが，ユニークな版型や装丁，カラー印刷を美しくあげる用紙の選定など，写真集に非常に重要な印刷面に細やかな配慮がうかがえる。これも著者のこだわりに応じた粋な措置であろうか。

（秋山元秀）

〔注〕

1）ここで「仕事」という用語を使ったが，金坂氏の用語では，科学的研究というべきかもしれない。しかし筆者自身はこれを「科学的」と呼ぶことには疑問を感じている。そこで敢えて「仕事」という用語を使う。このような「こだわり」を述べるのは，金坂氏の「こだわり」に敬意を払い，それを尊重する故である。これについては別に論じたい。

2）‘the activities of persons travelling to and staying in places outside their usual environment for not more than one consecutive year for leisure, business and other purposes’ の部分訳。

3）Johnston, R.J., Derek Gregory, Geraldine Pratt and Michael Watts ed.: *The Dictionary of Human Geography*, 5th ed. Wiley-Blackwell, 2009ちなみに同事典第4版（2000年出版）では，geography and travel writing（地理学と旅行記）という項目があって，Derek Gregory氏によるやはり2ページにわたる記述があった。この5版ではこの分野の専門家J.S. Duncan氏が執筆に加わっており，内容も大きく変わっている。とくにtravelling theoryの項目がたてられたのはE.Said氏のオリエンタリズム批判にかかわって提出された旅することの意義について，地理学でも真剣に検

討されるようになったことによる。わが『人文地理学事典』はそれに対応している。

4）金坂清則『イザベラ・バードと日本の旅』（平凡社新書）平凡社2014，14-15頁。実は上に引いた英文事典の旧版では金坂氏と同様の見解がより明確に述べられていた。「geographyの考え得る意味の一つはearth-writingであり，地理学と旅行記の間には密接な関係があると考えられる。」にもかかわらず空間科学としての現代地理学の展開の中で，伝統的地誌のもつ感性（sensibility）が失われ，地理学自身は旅行記のような異なる地域や人びとについての描写への関心をもたなくなっている一方で，一般社会においては旅行記から得られる想像力をかきたてる記述や大衆向きの地理学（popular geography）に大きな関心が寄せられている，という矛盾を指摘している。

5）John Keayを総編集とするThe Royal Geographical Society: *History of World Exploration*, Mallard Press, 1991はおそらく現在得られる最良の探検史であろう。

6）秋山元秀「グローバル・フィールドワークの構想」（金坂清則を代表とする科学研究費補助金の研究成果報告書『19世紀アジアを描く英国人旅行家の旅行記と旅に関する歴史地理学的研究』2005）217頁。

7）本書4頁。以下本書からの引用は引用文の後にページ数だけを記す。

8）著者はこの「ツイン・タイム・トラベル」という語を商標登録している。

9）宮本常一『菅江真澄』（旅人たちの歴史2）未来社1980，ちなみに宮本には『イザベラ・バードの日本奥地紀行を読む』（平凡社ライブラリー）2002という著作もある。

10）菅江真澄の足跡を活かした地域活性化に関する検討会『菅江真澄の足跡を活かした観光振興に向けて～秋田・再発見から北海道・東北への提言～』平成17年2月28日（国土交通省）。

11）金坂清則「『京城勝覧』とその旅―貝原益軒にとっての京都を視野に―」（石原潤・金坂清則・南出眞助・武藤直編『アジアの歴史地理1　領域と移動』朝倉書店，2007）なお本書にはやはり金坂氏による「イザベラ・バードとアジアの旅」という論考も収められている。

12）前掲4）参照。

13）金坂氏による「完訳本」がある。金坂清則訳『完訳日本奥地紀行』1～4（東洋文庫）平凡社，2012～13。また『新訳日本奥地紀行』（東洋文庫）平凡社2013もある。他の翻訳書との違いや問題点などは前掲4）参照。

14）ちょうど同じころ発表されて話題になったジュール・ベルヌの『八十日世界一周』（Jules Verne: *Le tour du monde en quatre-vingt jours*, 1873）は，いうまでもなくフィクションであるが，ロンドンから出発して東回りでアラビア・インドを経由してシンガポール・香港を経て横浜に至り，太平洋を横断してアメリカ大陸西海岸へ，大陸を横断してニューヨークへ，そして大西洋をわたってロンドンへ帰還するのである。これで十分「世界一周」だったわけで，イザベラ・バードの旅行が，時間をかけているとはいえいかに大変な規模をもつことがわかるであろう。

15）旅行と探検との関係や比較については，本件に関連して興味深いテーマであろう。例えば筆者はイザベラ・バードと同時代に限れば，それに匹敵する旅行家あるいは探検家としてはスウェン・ヘディンを思い浮かべる。やはりこれまでの地理学史では正当に扱われていないだろう。

16）前掲4）ほか。金坂氏のイザベラ・バードについての論考は，本稿に引いたもの以外にも多数ある。それらは次を参照。「金坂清則先生の略年譜と業績」（京都大学大学院人間・環境学研究科地域と環境研究会『地域と環境』12号，2012）。2012年以降も新聞記事等も含めて多数ある。

17）この行程を正確に復元することの実際の困難な作業については，金坂清則・鍾翀「『揚子江流域とその奥地』（1899）に関するツイン・タイム・トラベル的調査―イザベラ・バードの四川盆地陸路の旅のルートの走破を中心に―」（前掲6）所収）を参照するとよくわかる。

18）本書の写真については，使用機材やフィルム

等についての説明は全くないが，おそらく35mmのポジフィルムを使っておられるのではないかと想像する。したがってノートリミングでいくと，すべての写真は長方形にならざるを得ない。私などは，時には正方形の判型による風景が好きなので，そういうレイアウトもあっていいのではと思ってしまうが，これは余計な議論になるだろう。かえってそういう写真技法ズレしていない新鮮な感覚が，ありのままの風景，ありのままの情景を現出しているのだと思う。

19）イザベラ・バードの生地はスコットランドではないが，イザベラ30歳くらいの時にエディンバラに引っ越し，終生そこに暮らした。ちなみに著者は生地のヨークシャー・バラブリッジの家から，結婚式を挙げた教会など，彼女の生平にかかわる土地もすべて訪問し，その写真も付録として掲載している。

20）翻訳については筆者も別に論じたいが，英語で書かれた英国のことを記述した書物なら，英国の文化を念頭におき，それを日本人が理解しやすいような日本語で表現することに留意すればよい（それも容易なことではない）。しかしイザベラ・バードの日本の旅行記，あるいは中国の旅行記なら，イザベラは日本なり中国の風景，文物をみて，それらを記述する際に英語に翻訳しているわけである。文章の翻訳ではないが，英語の語彙を使い，英語の文脈を用いれば，当然英語を使うものにわかりやすいように記述されているはずである。それを再度日本語なり中国語に翻訳するなら，対象を再度もとのかたちに戻すことになる。いわば二重の翻訳をしなければならないのである。どうも金坂氏以前の翻訳者は，英語から日本語に翻訳することには留意しているものの，その前のイザベラ・バードが日本や中国のものを，どのように英語に翻訳したのかについては，ほとんど留意しなかったようである。この点について金坂氏は別著の中で厳しく批判している。